

手を携え「共生社会」実現を

障がい者 スポーツ支援 SON・熊本と包括連携協定

スポーツを通じて知的障がい者の社会参加と自立を目指すスペシャルオリンピックス日本・熊本（SON・熊本）と本学が16日（火）、多様な人々が生き生きと暮らせる共生社会の実現に向けて包括連携協定を結びました。本学が障がい者スポーツの団体と連携協定を結ぶのは初めてです。



調印式後、記念撮影するSON・熊本と本学の関係者

締結式は本学1204・1205会議室であり、関係者計15人が出席。竹屋元裕学長と潮谷義子SON・熊本理事長が協定書に署名しました。

これに先立ち、竹屋元裕学長が「将来、医療人を目指す学生たちに、『共生社会』がどういうものか、非常に近くで学ぶ大変ありがたい機会をいただいた。この協定がお互いの組織にとり実り多いものになることを期待します」とあいさつ。

SON・熊本の潮谷理事長は「SOは、創立の時から『誰一人取り残さない』活動を続けていくことが大きな目標になっております。障がい者に対する特別な取り組みの中で、存在感を発揮できるような体制を作っていただけではないかとい

う喜びの中で包括協定を結ばせていただきたいと思います。」などと述べました。

協定締結後は、早速、本学が開講している「障がい者スポーツ指導論」に、SON・熊本に登録するアスリートを招待し、本学の学生との交流を予定しています。

SON・熊本は今年発足30周年を迎え、28日（日）に熊本城ホールで「Be with all～みんなが輝き だれひとり取り残されない共生社会を目指して」をテーマにした記念事業を開催します。第1部の記念式典に続き、第2部のシンポジウムには本学の久保下亮准教授も参加します。

(NL編集部)



協定書に署名する竹屋学長（右）とSON・熊本の潮谷理事長



協定の概要を説明する久保下亮准教授（右）

東京の名門バレエ団に所属していた矢加部未来さん＝写真＝は4年前、子どものころから打ち込んできたバレエに別れを告げ、本学への入学を決断しました。現在、リハビリテーション学科理学療法学専攻4年。「舞台上見る人を感動させたい」という夢を「バレエを志す子どもたちに寄り添いたい」という思いに切り替え、まっすぐ前を見つめています。



「子どもたちの夢を支える存在になりたい」

小学5年生の時にバレエを始めた矢加部さん。19歳の時に憧れだったバレエ団に入団を果たしました。しかし、長年の酷使から脚に故障を抱えていたこともあり、プロとしての活動は「覚悟していた以上に厳しかった」と言います。日々の練習や仕事をこなすことに精いっぱい、体調の維持が困難になり、遂に退団することを決意しました。

退団後、PTの道を選ぶのに時間はかかりませんでした。「実は、バレエ団にいたころも、体を変えていくための研究が楽しかったんです」。バレエを始めたころから体が硬く「プロは無理と言われ続けてきた」という矢加部さん。度重なる故障を克服しプロになるという夢を実現できたのは、中学時代、ある女性理学療法士（PT）との出会いがあったからだといいます。彼女が矢加部さんに施したのが、ピラティスと呼ばれるエクササイズの種類。根本的な体の動かし方や、けがに対するアプローチの仕方などの指導を通じ、矢加部さんは「自分の体はこんなことができるんだと思うようになり、以後、自分でも（バレエが）急速に上達していくのがわかった」と振り返ります。

退団時、恩人でもあるくだんの女性に相談したところ、進めてくれたのがPTの道でした。「ダンサーをケアする側としてバレエに携わり、多くの子どもたちの夢を支える存在になりたい」。矢加部さんが本学を選ぶのに迷いはありませんでした。1年次にはピラティス講師の資格も取得し、自ら教室を開いています。年下のクラスメートたちとも打ち解け、「何よりも勉強すること自体が楽しい」と、遅れてきたキャンパスライフを謳歌。一方で、実習や「将来のためにも、たくさんの経験を積める職場」を求めている就職活動にと、忙しい日々を送っています。
(NL編集部)

新会長に六倉さん選出 学友会総会

学友会の本年度総会が18日（木）、50周年記念館であり、新会長に六倉柗さん（リハビリテーション学科理学療法学専攻3年）を選びました。

総会には約110人が参加。現会長の松山直央さん（同4年）が学校関係者などにお礼の言葉を述べた上で、コロナ禍で活動が制限されながらも杏祭を開催できたことなどを報告。新執行部に対し「思い出と経験を積んでほしい」とエールを送りました。

一方、六倉新会長は、「学友会は皆が多くの活動を楽しむことができ、学友会生同士の仲も良い。皆に活躍の場を与え、積極的に責任をもって学友会をひっぱりしていきます」と決意を述べました。（入試・広報課）



学友会総会で、新執行部を紹介する六倉新会長（左端）



仙波 梨沙
リハビリテーション学科
生活機能療法学専攻准教授

私は、子どもさんとその家族の支援についての研究を行っております。放課後等デイサービスを利用されている子どもさんの感覚の特性、家族のストレス状況、利用目的や頻度等との関係性を調査しています。複数の放課後等デイサービスを利用している子どもさんがほとんどであり、利用頻度が少ないと母親のストレスが高いことがわかってきました。今後は、子どもさんの感覚特性と家族のストレスのより詳しい関連性を調査しながら、家族へのインタビューなどもできればと考えています。

嶋村 剛史
リハビリテーション学科
理学療法学専攻教務嘱託



私の研究テーマは動きに関する研究です。主に、起立・着座や歩行動作を対象にしてきました。理学療法における客観的なデータの蓄積は喫緊の課題です。これまでに様々な研究報告がありますが、臨床場面での活用には多くの改善点が必要で、低コストかつ計測が容易で信頼性が求められます。今ではスマートフォンを所持している方も多いと思いますが、その機能に含まれるカメラやセンサーを利用して動きの滑らかさや質の評価の有用性を報告していきます。

銀杏アラカルト



◆医療人としてのマナー学ぶ オフィス富士川の富士川とし子氏=写真=を講師に招いての「医療人としてのマナー講座」が19日（金）、1301L講義室であり、医学検査学科1年次生が挨拶や身だしなみ、言葉遣いなど日頃当たり前にしていることを改めて考え直しました。主催した就職・実習支援課では、年次ごとにテーマを定め、就職ガイダンスを行っており、本講座もその一環です。講演で富士川氏は、「医療機関にサービスを受けに来る患者様の気持ちを考え、不安を少しでも軽減できるような接し方を」と話し、「節度を保った言葉遣い」「相手の状態を察知した適切な表情」を心がけるように呼びかけました。さらに、「患者様に対して絶対に先入観を持たないこと」の大切さを訴えていました。（入試・広報課）

学生の眼

アイドルグッズの使い方

リハビリテーション学科言語聴覚学専攻2年 橋口 璃央

私は何年も前から、あるアイドルグループの大ファンだ。だから、このグループに関するアイドルグッズを買い続けている。ペンライトやうちわはライブ参戦時の必須アイテムだし、持っているだけで幸せな気分になる。日常生活において使うことはほとんどないが、それでもいいのだ。この考えが、家族には理解できないらしい。

昨年9月、台風14号の影響で県外にある実家が停電した時のことだ。家族から熊本に住む私のもとに1枚の写真が送られてきた。それは、真っ暗な部屋にいる妹と父を写したものだ。2人が手にしていたのは、ペンライトとアイドルの



顔が大きく印刷されているうちわ。懐中電灯と扇風機代わりにしているらしい。そして、写真に添えられたメッセージには、「アイドルのグッズは防災グッズにもなって、悪くないね」とあった。あまりにも斬新なグッズの使い方にはツッコミを入れたかったが、グッズを「悪くない」ととらえてくれたことが単純にうれしかった。

私には思いもよらないグッズの使い方だったが、私の「推し活」も少しは認めてくれたのでは。家族の防災のためにも、たくさんグッズを買っていくぞ。

（アカデミックスキル支援センター・学生広報スタッフ）

13（土）、14日（日）、大分県別府市で開催された第88回日本温泉気候物理医学会総会・学術集会で、岩下佳弘准教授（リハビリテーション学科理学療法学専攻）が優秀論文賞を受賞しました。

受賞論文のタイトルは「Are saunas beneficial or harmful for autosomal dominant polycystic kidney disease? Examination with pcy mouse model」（邦題：「短期間のサウナは多発性嚢胞腎にとって有益か否かー多発性嚢胞腎症マウスモデルを用いた基礎的研究」）。

岩下准教授は、飯山準一特任教授が抱えている遺伝性の嚢胞性腎疾患である常染色体優位多発性嚢胞腎と入浴の関係を探ろうと、研究を進めてきました。今回の論文では、十分な水分補給を行った多発性嚢胞腎のモデルマウスを使用し、深部体温を約1.5℃上げるサウナに週2回、4週間反復した結果、腎障害の進展や嚢胞の増殖・拡大は認められませんでした。このことから、十分な水分摂取を伴う

サウナは、短期的には腎機能を悪化させないことが証明されました。

受賞した岩下准教授は「賞をいただき感謝しています。基礎研究のデータではありますが、飯山先生の病気に入浴が短期的に悪影響を及ぼさないことが示唆され嬉しく感じています」と話していました。（入試・広報課）



学会の授賞式で賞状を受け取る
岩下准教授



ボランティアグループ GENERATION & 南部SG

がんと向き合う…チャリティー参加

今回GENERATIONメンバー21人と南部SG（スモールグループ）10人で、13日（土）に熊本市中央区の白川公園で開催されたリレー・フォー・ライフ・ジャパン2023くまもとに参加しました。リレー・フォー・ライフとは、がんの告知を受けたことのある方（サバイバー）やサバイバーを支える家族・友人・医療者など（ケアギバー）を支援し、地域全体でがんと向き合い、がん征圧を目指すチャリティー活動です。

参加するにあたり、私たちのテントに掲示する子宮頸がんと肺がんについての勉強会や販売する商品の準備を行いました。私達はアロマストーン、ハーバリウム、かぎ編みのフラワーやストラップ、南部先生の絵画を販売し、9100円を売上げ寄付しました。公園内のリレーでは熊本保健科学大学のたすきを交互にまわし繋ぎました。また、その他参加受付やルミナリエ受付、ルミナリエの設置等のボランティア活動を行いました。公園内ではサバイバーさんの話を聞くことができ、普段出来ない良い体験となりました。

（医学検査学科3年・鬼塚萌愛）



南部雅美教授（中央）とマスコットキャラクターASO坊健太くんを中心に、本学テント前で記念撮影をする学生たち